



工学部広報



特待生及び奨学生賞状授与式

平成23年度日本大学特待生及び各種奨学生賞状授与式を8月3日(木)に執り行いました。詳細は次の通りです。

日本大学特待生(甲種)	4名
(乙種)	20名
古田奨学生	1名
ロバート・F・ケネディ奨学生	1名
オリジナル設計奨学生	2名
エヌドット奨学生	16名
桜樹奨学生	23名
工学部奨学生(第1種)	12名
(第2種)	3名
(第3種)	4名
工学部五十嵐奨学生	10名
計	96名

受賞者

化学系学協会東北大会で優秀ポスター賞を受賞



9月17日(土)・18日(日)に行われた化学系学協会東北大会(日本化学会東北支部主催)において、物質化学工学専攻博士前期課程1年の市川司さん、博士後期課程3年の小林隆一さんが「優秀ポスター賞」を受賞。市川さん(写真左)は「ポリシロキサンを主成分とする四級イミダゾリウム塩の合成」、小林さん(写真右)は「ランダム変異導入による大腸菌エステラーゼの新規活性向上変異体の取得」について発表しました。

第15回東北建築学生賞最優秀賞受賞



11月8日(火)、第15回JIA東北建築学生賞(財団法人建築協会東北支部主催)の公開審査が仙台市の「せんだいメディアテーク」で行われ、建築学科4年の仲田亮平さんが最優秀賞(1位)を受賞しました。受賞作品「TRANSFORM—暮らしの記憶—」は、「避難者のための集住体」の課題として作成されたもので、復興への思いが建築に表れていると高い評価を受けました。

体育会継承式



11月12日(土)、平成23年度日本大学工学部体育会第44代常任役員会継承式及び披露宴が行われました。各団体の新しい代表者等が集まり、体育会第44代委員長と常任役員が任命され、新たな決意を表明していました。

ロハスの家3号の完成発表会を行いました



ロハスの家3号が竣工に完成。11月17日(木)には、製作に携わった協力会社を始め、報道関係等約30名を集めて完成発表会を行いました。ロハスの家3号では太陽光・熱、地中熱の利用に加え、収集した雨水をキッチン・バス・トイレに再使用するなどの技術確立をめざします。参加者も、「デザインも機能もより家に近い」「実現すれば「面期的なシステム」と大きな期待を寄せていました。

光化学協会賞を受賞



9月6日(火)～8日(木)に行われた2011年光化学討論会(光化学協会主催)において、生命応用化学科の加藤隆二教授が2011年光化学協会賞を受賞しました。受賞研究名「過速吸収分光法を駆使した光エネルギー変換反応の機構解明に関する研究」は、「人工光合成」の技術開発に貢献が期待されるとして高い評価を受けました。

シンポジウムで優秀発表賞を受賞



9月9日(金)に行われた日本セラミックス協会第24回秋季シンポジウム特定セッション「水溶液反応場に基づいたセラミックプロセス」において、物質化学工学専攻博士前期課程2年の橋本憲一さんが優秀発表賞を受賞しました。この賞は、全国規模である日本セラミックス協会の特定セッションにおける発表53件中5件の一つとして選ばれたものです。

徳定川清掃

10月15日(土)、工学部キャンパスを流れる徳定川の清掃が行われました。あいくの雨模様の中、土木工学科の水環境について学ぶ4つの研究室の学生40名と卒業生6名が参加。12月目を迎える恒例の行事とあって、楽しみにしていたというOBの大先輩も駆けつけ、清掃終了後の懇親会は大いに盛り上がりました。学内の環境改善だけでなく、徳定川の水質改善につながる活動として、地域の人々にも参加していただけるよう、今後も続けていきたいと考えています。

工学研究所NEWS

「産学連携セミナー」開催



10月25日(火)に郡山ビューホテルアネックスで「産学連携セミナー」を開催しました。東邦銀行と日本大学工学部は、平成20年度に産学連携協定に関する覚書を締結しており、本セミナーは産業界と大学のマッチングを図る目的で実施しています。今年度は「自然エネルギーの活用」をテーマに第1部では本学部教員よりロハスの家に関する講演。第2部では本学部と民間企業の連携事例紹介として、企業の代表者による講演を行いました。県内の企業を中心に約100名が参加。セミナー終了後は、日本大学産官学連携財センターコーディネーターによる個別技術相談会も行いました。

「第12回産・学・官連携フォーラム」開催



11月10日(木)に本学部60周年記念館で「第12回産・学・官連携フォーラム」を開催しました。今回のテーマは、「ロハスの工学」による持続可能な地域社会とコミュニティ形成へのアプローチ。震災からいち早く復興された林精器製造株式会社代表取締役社長の林 明博氏による基調講演や「ロハスの工学」による復興加速と持続可能な社会の実現に向けた一般講演、「震災復興への課題、そして残された価値による新しい地域創成と世界への発信」をテーマにパネリアスカッションを行いました。また、学内に設置されている「ロハスの家」の見学も行い、各分野の企業を中心に約60名にご参加いただきました。



◆第61回北桜祭◆
~One lifetime, One meeting~
北桜祭はボクらの甲子園 P1~2

◆課外活動特集◆
課外活動応援団! P4~6

◆震災への取り組み◆
ニチダイ・サステナブル・プラットフォーム活動報告 P7~9
震災への取り組みPart2 P10

◆研究◆
パッシブデザインコンペ大賞受賞・P11
最先端・次世代研究開発支援プログラム P12

◆就職特集◆
2011就職最前線! 就職内定者に聞く! P13~14
ここがポイント! 工学部の就職支援 P15~16
社会で活躍する卒業生 P17~18
工学部だより P19



□人事

役職任命	事務局長	就職指導課長補佐	経務課	教務課	庶務課	教務課
事務局長次長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長
中野 榮人	安食 貞則	高田 イミ	渡邊 保之	中田 真寛	金子 祐介	
(平成23年11月2日)	(平成23年11月2日)	(平成23年11月2日)	(平成23年11月2日)	(平成23年11月2日)	(平成23年11月2日)	
退職(定年)	退職(定年)	退職(定年)	退職(定年)	退職(定年)	退職(定年)	
事務局長次長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	
今村 信一	高橋 将一					
(平成23年11月2日)	(平成23年9月30日)					

未来へ語り継ぎたいものがある
工学部広報
2011 No.233 平成23年12月5日

編集:日本大学工学部広報委員会
発行:日本大学工学部 TEL(024)956-8618
〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1
http://www.ce.nihon-u.ac.jp/ E-mail koho@ao.ce.nihon-u.ac.jp



この印刷物は再生紙を使用しております。

第61回 北桜祭

~One lifetime, One meeting~

『一期一会』をテーマに、 出会いの大切さを感じるイベントにー

今年、3月11日に発生した東日本大震災を経験し、人々がより一層大切に感じた“人と人とのつながり”。第61回北桜祭のテーマ「One lifetime, One meeting.」は、茶道の「一期一会」に由来する言葉であり、北桜祭を通して家族、友人、そして地域の人々との出会いの大切さを感じてほしいという思いから選ばれたテーマです。さまざまな困難を乗り越えてなんとか開催の日を迎えることができ、北桜祭実行委員会ほか、関係者たちも嬉しい気持ちと安堵の思いで胸をなでおろしていました。

ここを拠点として、「復興」をキーワードにしたイベントや取り組みが紹介されたことも、例年とは違う意味深い北桜祭となりました。当日の様子をレポートしながら、「工学部ならではの“工学部だからこそ”の北桜祭を紹介いたします。

#3 北桜祭を通じて社会に貢献

今年、初の試みとして実施された企画の一つ「放射線講義」。復興をキーワードに地域の方々と一緒に考える機会を設けるために、放射線という最も関心の高い問題を取り上げて講義を行いました。近隣の住民の方や農家を営む地元の方や学生など多くの人が集まり、熱心に耳を傾けていました。放射線の知識や今後の対応について有効な情報を得られたようでした。講師としてご来学いただきました上田昌文先生と石井慶造先生には、深く感謝申し上げます。

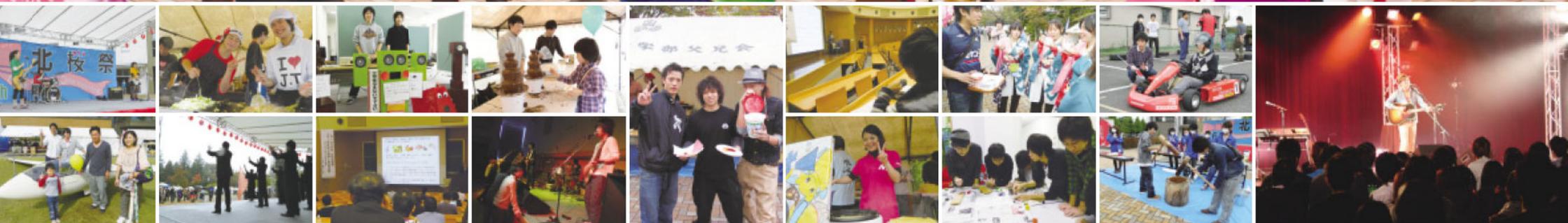
この講義を企画した北桜祭実行委員会副委員長の秦雅さんは、日本大学全学部等学部祭実行委員会(大学生サミット)の副委員長も務めています。大学生サミット社会貢献部では、NU祭(日本大学学園祭)を通して、社会に貢献するために、N.募金やエコ活動を行っています。今年度は東日本大震災の被災地復興支援の募金活動を展開しています。日本大学約8万人の学生の大きく力強い支援の心が伝わってきます。北桜祭でも募金を呼びかけ、多くの方に募金いただきました。ありがとうございました。

#4 世界で一つの出会い

人との出会いの大切さはもちろんのこと、モノの大切さを伝えるために、今年はフリーマーケットを実施。また、各展示会場でも、学生たちの手作りの作品がズラリと並べられ、世界に一つしかないモノとの出会いも楽しめました。天文同好会は手作りのプラネタリウム、木匠塾は木で作ったバターナイフやスプーン、音響研究会の手作りスピーカーはデザインも響く音色も世界に一つだけ。モゾくりを通して、モノとの出会い、人との出会いがあるのも北桜祭の魅力です。

今年初めて行われたソフトボール大会も8チームが参加し、熱戦が繰り広げられました。優勝は軟式野球部1年生で結成した「福岡ソフトバンクホークス」。チームワークで勝利を引き寄せました。

また、模擬店の参加数も34店舗と昨年を上回りました。「みんなで思い出を作ったかった」という電気電子工学科の有志たちのように、工学部での出会いを大切にしたい学生たちの強い思いが表れているようでした。



#1 雨にもマケズ、震災にもマケズ

平成23年10月22日(土)、朝からあいにくの雨模様となり、第61回北桜祭の開祭式は、70号館五十嵐ホールで行われることになりました。それでも、会場に集まった学生たちの表情は明るく、この日を迎えられた喜びで元気いっぱいでした。雨のやんだ70号館玄関口で、恒例のバルーンリリースが行われ、万感の願いを込めてエコ風船が空に放たれると、いよいよ北桜祭の開催です。

この日は、クイズ大会、ビンゴ大会、演武会などのステージイベントに加え、他大学から応援に駆けつけたバンド演奏による復興イベントも実施されました。

#2 被災地から元気を届けたい

北桜祭実行委員会からの呼びかけで、普段から交流があった同じ福島県内にある福島学院大学と郡山女子大学から、5つのバンドが北桜祭のステージに立つことになりました。「一緒に福島を元気にしたいー」そんな思いを胸に、楽しい演奏を披露してくれました。「これを機に、互いの交流を深めていきたい」と、大学間の絆を強く結びつけるきっかけになったようです。

小雨の降る中、熱い演武で盛り上げてくれたのは、応援団と合気道部、気合の入った勇姿にたくさんの拍手が送られました。その他ダンスやジャギングなどのパフォーマンスには、観客も傘をさすのを忘れるほど魅了されていました。

#5 学生たちの絆が深まった北桜祭

北桜祭実行委員会委員長の齋藤康平さんは、北桜祭を振り返り、その思いを語ってくれました。「震災の影響でどうなるかと思いましたが、雨も降る中、2日間7,500人余りの来場者数があり、来てくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。今年の北桜祭は、学生全員でやったということを感じました。参加してくれた皆さんにも心から“ありがとう”を言いたいです」。

被災地仙台から芸能祭に来てくださったRakeさん、曾根川由江さんにも御礼申し上げます。来年も皆さんのチカラで、今年以上に元気な北桜祭を実現できるように頑張ります。(写真左から副委員長の齋藤詢さん、委員長の齋藤康平さん、副委員長の秦雅さん)



→ 北桜祭はボクらの甲子園

北桜祭で輝いていたサークルをクローズアップ!!

子どもから大人まで楽しませる

ヨーヨー、ボール、アピルスティック、ディアボロ等の様々な道具を使った大道芸で、子どもから大人まで楽しませてくれたジャグリング愛好会。昨年に結成されたばかりの新しいサークルです。日頃の練習の成果を北桜祭で披露してくれました。「失敗することもありましたが、観客の皆さんが盛り上げてくれたおかげで、楽しく演技できました」と話すメンバーたち。

動物やハートなどを風船でつくるバルーンツイストのプレゼントでは、子どもたちの笑顔がたくさん見られました。「自分たちの芸で人を喜ばせたり笑顔にしたりできて、このサークルを立ち上げて、本当によかったと思います」と満面の笑みを見せていました。



ジャグリング愛好会



卒業生、高校生と絆を深めた演奏会

昨年結成50周年を迎えた管弦楽部。大学に入ってから楽器を始めた人がほとんどというメンバーですが、先輩や経験者から教えてもらいながら腕を磨き、北桜祭での演奏会をメインとした活動を行っています。毎年、北桜祭では卒業生も演奏に参加していただいています。今回は震災復興コンサートで交流のあった日本大学東北高校の生徒さん2名にも参加してもらい、大演奏会になりました。クラシックだけでなく、ティズニーやジブリ、その他映画音楽にも挑戦。「一緒に演奏できて楽しかったです」と高校生も喜んでいました。演奏を通じて、先輩・同輩・後輩たちとの絆が一層深まった北桜祭。来年には記念誌も発行する予定です。



管弦楽部



課外活動応援団!

さまざまな課外活動を通して、活躍する学生たちをクローズアップして紹介します。

北日本インカレやり投げ部門で優勝!



岩崎 勝彦さん

陸上競技部
(機械工学科3年)

陸上競技部主将の岩崎勝彦さんが、北日本学生陸上競技対校選手権大会のやり投げ部門で1位となり、9月8日(木)から熊本県で行われた全国大会・天皇賜杯第80回日本学生陸上競技対校選手権大会(日本インカレ)に出場しました。岩崎さんには勝負に勝つ強い思いがありました。母校の福島県立小高工業高校が原発災害の影響により、他校を間借りして授業を行うサテライト方式での授業を余儀なくされ、地震や原発に苦しむ福島を元気にしたいという思いがずっとあり、あえて「fukushima」のジャージで大会に臨みました。結果、仲間の応援にも助けられ全国28人中15位という成績を修めることができました。

高校時代から国体で2位になるなど頭角を現していた岩崎さんですが、名門体育大学からの誘いを退け、就職に強いと地元で評判の本学部に入部。自分の成績を上げるだけでなくチーム全体を強くしたいという思いから、主将として陸上競技部を率いてきました。来年は、他の部員たちとともに全国大会に出場し、やり投げ部門で入賞を目指すことが岩崎さんの目標です。



アーチェリーで全国大会出場!



金子 卓矢さん

洋弓部
(電気電子工学科4年)

第43回東北学生アーチェリー個人選手権大会で、洋弓部の金子卓矢さんが見事3位になり、9月14日(水)から大阪府で行われた第50回全日本学生アーチェリー個人選手権大会に出場。結果は、自分の力を存分に発揮できませんでしたが、初めての全国大会の舞台に立ち、次につながる貴重な経験ができたこと手ごたえを感じています。

金子さんがアーチェリーを始めたのは高校生の時。実力が開花したのは大学に入ってからで、国体にも出場するほど上達しました。「ふとしたきっかけで伸びるスポーツだと言われていますが、ミスが減らして確実に点数を取れるように、練習を重ねた成果が表れた」と金子さんは話しています。

アーチェリーは毎日続けることが向上の秘訣。そして集中力が鍵を握ります。そのおかげで、持続力と集中力が身につく。勉強にも活かされているそうです。「アーチェリーは点数制。だから、上達度が一目でわかるし、達成感があります。楽しいと思う気持ちがあれば確実にレベルアップできるので、是非挑戦してほしいですね」とアーチェリーの魅力を語っていました。



東北学生剣道選手権大会で団体第3位!

昨年、14年ぶりに全国大会出場を果たした剣道部が、今年は東北学生剣道選手権大会で団体3位となり、2年連続全日本学生剣道優勝大会の切符を手に入れました。10月23日(日)に行われた全国大会では、初戦敗退とはなりませんが、先輩たちと同じ全日本の舞台上で競技できたことを心から喜んでいました。「全日本の独特の雰囲気がありました。負けはしましたが、持てる力は出し切ったと思います」と話す主将の篠崎拓也さん。自分から攻めて相手を倒す剣道を目指して、日頃から積極果敢に練習に打ち込む剣道部。決して高校ではスター選手ではなかった部員たちが、先生や卒業生の指導のもと、高い意識を持って実力をつけてきました。全日本で実績をあげることがこれからの大きな目標です。

剣道部(団体戦出場選手等)



英単語コンテストで優秀者表彰



今年で3回目を迎える1年次生を対象とした「英単語コンテスト」を9月16日(金)に開催しました。インターネット上でTOEIC模擬試験、語彙、文法、読解など4つの内容を学習できる「eラーニング」を活用して、日頃から英語学習に慣れ親しんでもらうことが目的です。今回は222名の学生がチャレンジし、10月27日(木)には、成績優秀者に対する表彰が行われ、41名の学生に記念品を贈呈しました。最も優秀な成績を修めた4名の学生に喜びの声を聞きました。



建築学科 町田 友矢さん
英語が武器になれば就職に有利になると思い参加しました。毎日少しずつ暗記しながら覚えた結果、語彙力がアップしました。

建築学科 ビスタ・ピネスさん
良い成績があげられて嬉しいと同時に自信にできました。大学時代にできることは何でも挑戦していきたいです。

生命応用化学科 深野 義人さん
不安な単語もありましたが、満点だったので驚いています。これから勉強に励んでいきたいと思っています。

生命応用化学科 夏目 里穂さん
これをきっかけに英語を好きになりたいと思います。勉強しました。今後もあるような資格にチャレンジしてみようと思います。

留学生を中心に広がる、タイへの募金活動

異文化コミュニケーション研究会は、工学部で学ぶ中国、タイ、マレーシアなどの留学生と英語力を身につけたい、海外留学を考えているという学生20名が所属するサークルです。

東日本大震災で本学部が被災した際、本学部にいる留学生にタイ王国から飲料水や災害対策生活用品等が届けられました。この度、大洪水に見舞われたタイの留学生で機械工学科4年ブラワットロニー・ノッパドンさん(写真左)とタイサワットパーニット・パッカナンさん(写真中央)は、「母国のために何か役に立ちたい」と思い、異文化コミュニケーション研究会のメンバーも手伝って、北桜祭開催期間の10月22日(土)・23日(日)に工学部キャンパス、11月4日(金)から6日(日)に郡山駅前募金活動を行ったのです。募金活動を提案した電気電子工学科3年の黒澤智則さん(写真右)は、今年の夏休みにタイでの留学を経験。「タイの人たちは本当にいい人ばかり。笑顔が素敵でとても好きになりました」と当時を思い出して、積極的に募金を呼びかけました。募金には多くの工学部生も協力してくれました。「東日本大震災で日本も大変な思いをしました。どこの国とか関係なく、各国が協力し合うことが大切だと思います」と話していました。ノッパドンさんとパッカナンさんも「郡山市民の方にもたくさん募金をいただきました。皆さんの温かい心に感謝いたします」と、御礼の言葉を述べています。11月16日(水)には、在京タイ王国大使館を訪問し、募金活動により集った義援金を贈呈いたしました。



仮設住宅のカフェでボランティア活動

赤十字奉仕団は、毎週土曜日に郡山市内の障がい者施設等でボランティア活動を行っています。施設では、フライングディスクなどのスポーツを通して、心の触れ合いを大切にしながら障がい者の方の手伝いをしています。今年は、NPO団体からの要請を受け、東日本大震災により仮設住宅で生活している方のために、仮設カフェを設けて心のケアを行うボランティア活動にも参加しています。

週末を利用してNPO団体と一緒に、三春町または富田町にある仮設住宅に赴き、仮設カフェを設置します。お茶を飲みながら気軽に話ができる雰囲気を作り、避難している方の話を聞いたり、何気ない日常の話やたわいのない話をすることで、ストレス解消に役立ててもらえればと考えています。「家を失くしたり、避難を余儀なくされた年配の方は、きつとつらいんだろうなと思います」と話すのは、赤十字奉仕団代表の土木工学科2年佐藤利樹さん(写真1列目右)。ボランティアという感覚ではなく、一緒に会話を楽しんでいるのだと言います。しかし、カフェ終了後は反省会を行い、良かった点や悪かった点を出し合い、次回に活かすために改善しているそうです。また、仮設住宅での不自由な点についてもアンケートを行っています。

赤十字奉仕団は、来年2月に福島県で開催される「スペシャルオリンピックス冬季ナショナルゲーム」でのボランティアにも参加する予定です。さまざまな奉仕活動を展開しながら、人の役に立つ団体をめざしていきます。



猪苗代湖水草回収ボランティア

アカデミア・コンソーシアムふくしまの地元学の一環として、10月29日(土)に猪苗代湖の水草回収活動を行いました。『清らかな湖、美しい猪苗代湖の水環境研究協議会』の中村玄正会長(日本大学名誉教授)のよびかけで、本学部土木工学科、機械工学科、物質化学工学科、水泳部の学生約70名が参加。曇りつつない秋晴れで、猪苗代湖もキラキラと輝いて見えたのですが、湖岸沿いにはたくさんの水草が打ち寄せられていて、異臭を放っていました。猪苗代湖は、近年の水質調査で再びランク外となるなど、かつての水質日本一をとり戻せないでいます。昨年からは本格的に始まった水草回収活動は、水生植物が枯死してCOD(水中の有機物)となる前に回収して、水質を改善しようというものです。この日の参加人数は約120名。地域の市民団体の方々と協力しながら、水際に打ち寄せられた水草をコンテナボックスに集めました。作業は1時間ほどで終了してしまいましたが、学生たちは体力が余って、まだまだやる気十分だったようです。



学生たちは、「今回参加して、猪苗代湖の水質汚濁の深刻さがわかりました」「作業は重労働でしたが、環境問題を身近に感じられるいい体験になりました」「猪苗代湖の水質改善に役に立ててよかったです」と感想を述べていました。11月26日(土)には、工学部キャンパス70号館にて報告会が行われました。



福島を元気にしたい、役に立ちたい

ニチダイ・サステナブル・プラットフォーム活動報告

東日本大震災後、日本大学工学部では福島県を元気にするために、支援の拠点となる「ニチダイ・サステナブル・プラットフォーム(NSPF)」を立ち上げ、教育・研究・人材を活かしたさまざまなプロジェクトに取り組んでまいりました。

被災地にある大学として、何か役に立ちたい一発端はそんな教職員、学生たちの思いからでした。これまで工学部で培われた英知を結集して取り組んだ8つのプロジェクト。その活動について、ご報告するとともに、さらに地域社会に貢献できるように、新たな決意を表明いたします。



NSPF11001 運動会応援プロジェクト プロジェクトリーダー:陸上競技部顧問 庶務課 相場 順一

“運動”を通じて子どもたちを元気にしたい

陸上競技部は、放射線の影響で屋外での活動を制限されている子どもたちのために、本学部の体育館を無償で貸し出し、運動会運営を支援するプロジェクトを立ち上げました。「自分たちが子どもの頃、大好きだった運動会。それができなくなった子どもたちはどんなに残念だろうか!自分たちにできる復興支援を考え、「運動会応援プロジェクト」を提案しました。

9月・10月に郡山市私立小原田幼稚園(約1,000名)、郡山市私立開南幼稚園(約400名)の運動会を本学部の体育館で実施。併設する日大東北高校の陸上競技部と協力して会場までの誘導や競技進行の補助をしました。久しぶりに思い切り走ることができた子どもたちは、本当に楽しそうであり、その笑顔で保護者も元気にしていました。閉会式では学生の呼びかけにより、来場者全員で「がんばろう福島!」と声を合わせました。

今後も「郡山シティーマラソン」での全盲ランナーの伴走や、「郡山市まちなか子ども夢駅伝」での先導など“運動”を通じて地域が元気になるよう、自分たちにできる活動を続けていこうと考えています。



NSPF11002 ビッグバレットふくしま簡易間仕切り設置プロジェクト プロジェクトリーダー:建築学科 市岡 綾子 専任講師

避難者のために力を合わせ居住環境の改善をめざして

避難所でのプライバシーを守るために、簡易でリサイクル可能な資材を使って間仕切りを設置する活動を、建築家坂茂氏によるプロジェクトの一環として、4月から6月にかけて7日間行いました。震災直後から、被災者のために何か役に立ちたいと思っていた44名の学生が本学部の呼びかけに賛同。慶應義塾大学のスタッフや地元のボランティアの方々とともに、ビッグバレットふくしまの避難所での間仕切り設置ボランティアに参加したのが始まりでした。友人からの話を聞き、さらに協力したいという学生の輪が広がり、建築学科の学生を中心に、のべ74名の学生の参加がありました。福島市のあづま総合体育館での設置活動に参加したり、設置後の要望を調査するなど活動は多岐にわたっています。

避難所の閉鎖に伴い、8月29日(月)に間仕切りの撤去作業にも参加。避難者の皆さんからは「いつも来てくれてありがとう。学生さんとの交流で元気をもらった」と感謝の言葉もいただきました。「一人一人の力は小さいけれど、結集すれば大きな力となる喜びを知った」など、学生たちも人として、エンジニアとして成長する貴重な体験になりました。今後も避難者のそばにいるサポーターとして活動を継続したいと思います。



NSPF11005 日大ひまわりプロジェクト プロジェクトリーダー:機械工学専攻2年 遠藤 麻衣

人とキャンパスを元気にしたい

「私たち学生にも東日本大震災について考える機会を作りたい」と思い、学生ができるプロジェクトを提案しました。学内にひまわりを植えることで、「除染の効果を確認する」、「大学を明るくする」、「放射能の正しい知識を学ぶ」ことを目的としています。7月7日(木)、空き地となっていた70号館の北側に面した敷地を耕し、ひまわりを植栽しました。機械工学科の研究室を中心に各学科8研究室の学生の皆さんや教職員の皆様にご参加頂きました。9月には大輪の花を咲かせたひまわり。空間線量のほか、茎や花の中の放射性物質の測定を行った結果、除染効果は殆ど無いことが確認されましたが、キャンパスが明るくなったことはもちろん、景観美化にも貢献できたと思います。10月13日(木)にはひまわりを引き抜き、今度は菜の花を植栽。前回よりも多い80名近い参加があったことは、学生たちの放射能やキャンパス美化への関心につながったと思われる。また、facebookによる情報発信も行っており、活動は学外にも広がっています。

菜の花の開花は来春。今後も花壇の管理と放射線測定を継続し、学科や教職員の垣根を越えて交流を深めながら、「ふくしま」を元気にしていきます。

日大ひまわりプロジェクト <http://www.facebook.com/NichidaiSunFlowerProject>



NSPF11009 児童施設の安心回復プロジェクト プロジェクトリーダー:総合教育 清野 健 准教授

子どもたちに安全と保護者に安心を提供する

郡山市では、小学校や幼稚園での放射線量を測定し、屋外での活動時間の制限を呼び掛けました。しかし、公立以外の私立幼稚園や認可外の保育園では、放射線量の測定が行われていません。公立とは違い、建物が木造だったり園庭もあまいな施設が多く、独自に対策を講じる必要があると考え、5月初旬からこうした16施設の放射線量を測定し、そのうち10施設で放射性物質の除染作業をボランティアで行いました。この活動には、学生5名も自主的に参加しています。

実際に木造の建物では放射線を通しやすく、室内であっても高い数値を示すことがあります。その場合の対策の一つは、建物の周りの土を除去することです。さまざまな対策について各施設に提案も行いました。

このような取り組みにより、安全な保育環境を確保だけでなく、放射性物質を除去するための有益な情報提供にもつながり、保護者の不安やストレスの解消にも役立ちました。

地域貢献のために一般家庭での対策についても、メディアを通じて情報を発信しました。



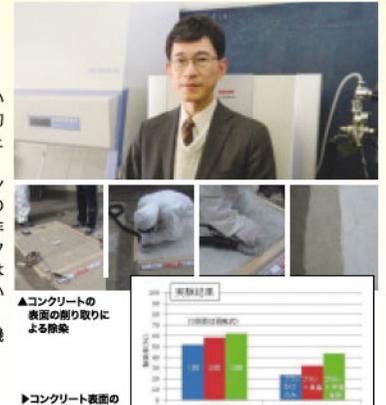
NSPF11010 放射線影響調査対策等に関するプロジェクト プロジェクトリーダー:生命応用化学科 春木 満 教授

アスファルト・コンクリート表面の放射能汚染除去

「放射線量を手軽に低減する方法を開発できれば、除染にも貢献できる」という観点から、工学部及び郡山地域の安全・安心に役立つ知識を得ることを目的に立ちあげたプロジェクトです。各学科の研究者が協力し合い、他のプロジェクトとも連携しながら対策について検討しています。

放射性物質が強固に結合するため、除去しにくいとされるアスファルトやコンクリートの表面。このような汚染に対して、家庭用的高圧洗浄機を用いて除染の効果を検証しました。結果、ブラシがけや除染剤を使った除去よりも、効果が非常に高いことがわかりました。さらに、吸引装置付きの削り機を使って、コンクリートの表面を削り取る除染方法も試みました。実験結果により、除染率は100%に近い値となったことから、放射性物質は1mm程度の表面に吸着していると推測できます。

こうした結果をもとに、効果的な除染方法の提案や効率よく除染ができる機械の開発などをめざしていきます。

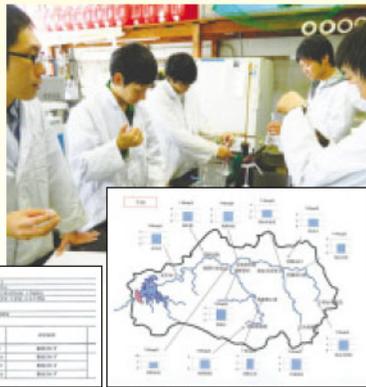


地域の水環境の安心と安全を守るために

郡山市などの4市町の水道水源である三春ダム。水質の変化が飲み水に与える影響は、人々の健康にも直接的な影響を及ぼします。また、空中に飛散した放射性物質は降雨により河川へ流れ、ダム湖に流入します。三春ダムの水質を研究テーマに掲げる衛生工学研究室では、水環境の変化を広く範囲にわたり、長期的かつ経時的に追跡できる「地域に根ざしたモニタリング活動」の実施をめざしています。

田村地区の商工会やNPO等と協力し、9月26日(月)に大滝根川(三春ダム)流域12カ所のモニタリング調査を行いました。放射性物質の分析は専門機関に依頼しています。その結果、放射性物質は検出されず水環境は良好な状態でした。10月18日(火)には、商工会の方々と調査結果の検討会を実施しました。

「地域の人々が何を求めているのか知ることが最も重要」であり、人々の声に応えていくことが土木工学の使命と考えています。今後も地元と協力し、調査を継続していきます。



▲放射性物質測定結果

▲大滝根川流域12地点の水質調査結果

使用最大電力15%抑制をめざした節電対策

原発事故によって、ますます電力不足が懸念される中、使用電力が最もピークを迎える7月から9月にかけて15%以上の抑制を図るよう、政府からの通達を受けました。ここ数年、地球温暖化対策への取り組みとして行ってきた節電対策。工学部では、更なる対策を打ち出しました。各教室の照明スイッチのON/OFFを各授業担当者に徹底、冷房温度を28℃に定め、気温の状況に応じてこまめにスイッチを切る、パソコンの省電力設定など、細かく対策内容を提示。教職員にはもちろん、学生にもポータルサイトを通じて協力を呼びかけました。

使用最大電力が規定値を超えないよう、管財課では毎日使用電力を監視し、調整を図りました。これにより、1日のうちでもピーク時とされる14時前後において、昨年と比べ使用最大電力を抑制することに成功。さらに実施期間の全体的な使用電力量も昨年度より約15%削減することができました。使用電力量の削減は、経費節減にもつながっています。

この夏の節電に対する教職員及び学生の皆様のご理解とご協力で深く感謝申し上げます。夏の上の節電とともに、冬の節電に向けても、ご協力いただけますようお願いいたします。



◀7月15日電力使用状況

▶日別ピーク時の使用最大電力

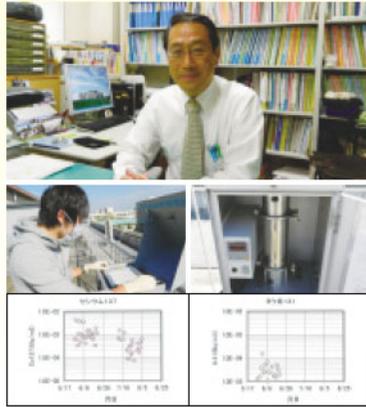
学生の安全な日常生活を確保するための取り組み

本学部では、安心できる環境を確保するために、さまざまな取り組みを行っています。

4月7日(木)以降、空間放射線量の計測を行い、毎日その結果をホームページで公開しています。7月には高圧洗浄によるキャンパス内の全建物の屋上・壁面及び舗装路面等の除染作業を行うことで、さらに放射線量が減少したことを確認しています。また、5月23日(月)より大気中の核種物質のモニタリングを行っています。その結果、セシウムやヨウ素の含有量は、北関東の他地域と同程度の数値でした。

学生が安全な日常生活を送っているかを把握するために、生活パターンの異なる5名の協力を得て、積算放射線量をモニターしました。結果は年間放射線量の基準値1mSv程度であり、時間の経過とともに放射線量は減少していることから、健康に影響はないと考えられます。

放射能の影響はどうか、どうすれば安全な生活を確保できるのか、被災地にある大学から発信していくことが重要であると考えています。今後は、食の安全についても独自に測定を行ってまいります。



震災への取り組み Part2

震災から半年以上が経ち、今後被災地がどのように復興していくかが大きな課題となっています。さまざまな問題も浮き彫りになる中で、工学部の研究をどのように活かしていくか、その具体的な取り組みも始まっています。地域への理解を深めながら進めている2つの研究について紹介します。

■須賀川市の復興のために、学生が調査・研究で貢献

地域を大学のキャンパスに見立て、地域社会の現場で学ぶプロジェクト「エリアキャンパスプログラム」。今年度は東日本大震災の被災をうけ、地域の復興に役立つ活動を目的とし、7月には、日本大学工学部と福島大学の学生が合同で、商店街への意識調査などを実施しました。その後は、研究室として被災状況や住民対象の意識調査を継続して行っています。合同で実施した調査結果について、須賀川商工会議所と連携し、9月29日(木)ホテル虎屋で、須賀川市民の皆様にご報告いたしました。

報告内容

1. 須賀川市中心商店街の個別経営者アンケート
～東日本大震災以降の商店意識調査～
2. 須賀川市における被災状況調査報告～文献を中心に～
3. 中心市街地ならびに周辺地域における住民意識調査～速報報告～



建築学科住環境計画研究室は、「須賀川市における被災状況調査報告～文献を中心に～」について発表を行いました。それぞれ7つのグループに分かれて、新聞記事やインターネットなどを元に調べてデータをまとめた須賀川市のインフラ・建物・公共施設等の被災状況や被災後の住民の生活環境への影響等を独自に分析。また、まとめとして、市岡綾子専任講師が住民意向アンケートの調査結果を速報版として報告しました。会場には、商店街の方々の姿も多く見られ、関心と期待の大きさが伺えました。住環境計画研究室では、さらに詳細な分析を深め、須賀川市民の皆様へ有用な情報提供ができればと考えています。学生が様々な側面からそれぞれの卒業研究のテーマを掲げ、実際に施設や住民へのアンケートや聞き取り調査等も始めています。市岡専任講師は、「住民の皆様が何を求めているのか、その声を復興に役立てることができるよう調査・研究を進めていきます」と話しています。

市岡綾子専任講師

※報告会の様子はホームページ工学部広報PLUSで紹介しています。

■汚染表土問題解決に向けた新たな取り組み

建築学科サンジェイ・バリーク准教授は、福島県の学校内に置かれたままの放射能汚染表土を安全に保管し、処分時も移動が簡単にできるコンクリートボットの開発のために、プロジェクトを立ち上げました。「建築学」「コンクリート工学」「原子力工学」等各専門分野の研究者が、大学間の垣根を越えて問題解決に挑みます。そのキックオフとして、10月22日(土)、次世代工学技術研究センタープレゼンテーションルームで、「郡山から大震災と原発災害の今後を考える」と題して、公開シンポジウムを開催しました。問題の現状と課題、具体的な実行可能な取り組みについて議論の場を設けることにより、被災地である郡山から解決の糸口を見いだしていこうという意図もあります。司会進行は、プロジェクトメンバーのまとめ役、京都大学の荒木慶一准教授。開催にあたり、出村克宣工学部長は「工学的見地からのアプローチによって、結果が花開くことを期待します」と述べられました。

- 問題提起:「福島県内学校における汚染表土問題の現状と課題・地中への置きただけで十分か?」—日本大学工学部サンジェイ・バリーク准教授
- 取り組み(1):「コンクリートボットによる放射性物質の封じ込めと見える化」
—技術コンサルタント 木村 健一氏
- 取り組み(2):「Monuments of the 3.11 Earthquake and Nuclear Disaster」—建築家 梅林 克氏
- パネルディスカッション:質疑応答による自由参加のディスカッション



放射性物質や放射線の基本的な知識と現在の福島県の状況を説明し、その対応策として、放射線を遮断する有効な方法の一つであるコンクリートを利用した案を提示。モニュメントのようなコンクリートボットにすることで、震災の記憶を風化させることなく、人との触れ合いを大切にすると心や困難を克服する強さを持ち続けてほしいという願いも込められています。シンポジウムに参加した地元企業の方も「学術的な立場の方が知恵を結集して、小さな光を大きなパワーに変えながら、復興への足がかりを作ってほしい」と話していました。「被災地にある日本大学工学部発の技術を発信していくことが、研究者としての役割です」とバリーク准教授も研究への意欲を語っていました。

サンジェイ・バリーク准教授

●パッシブデザインコンペ大賞受賞
**復興に貢献する近未来住宅
 「ロハスの家3号」に高い評価**

建築、環境、自然エネルギーなどのキーワードで繋がる人・団体で構成する「パッシブデザインコンペ実行委員会」主催による「パッシブデザインコンペ」で、建築学科浦部智哉准教授(写真右)を代表とする、エントリー名「ロハスの家」が見事大賞を受賞しました。浦部准教授と建築計画研究室が中心となって行ったロハスの家3号の基本計画・設計をベースに、住宅部門にエントリーした作品「二地域居住のためのロハスの家—仮設住宅からはじまるサステイナブルな計画—」。多くの著名な建築家が審査員に名を連ねるコンペで、「ロハスの家」がどのように評価されたか、浦部准教授に詳しくお話を伺いました。



■自然との共生を図ったパッシブ住宅

「ロハスの家3号」は、再生可能エネルギーのみを利用したパッシブ住宅を目指しています。それらに加えて、食の自給を目指すことで、エネルギー面だけでなく生活面でもサステイナブルな復興モデルになり得ると考えています。



太陽光発電や太陽熱収集システムはもちろん、地中熱を採取するクール&ヒートチューブを利用した冷暖房、水の熱容量の大きさを利用したウォーターウォールによる冷暖房、家の断面形状を活かした空気循環システムなど、さまざまな要素技術を統合して造られています。また、バタフライ屋根で得られた雨水を集水して貯水・処理まで行う水自給システムも組み込まれています。まさに太陽・風・雨などを利用した自然との共生を図ったパッシブ住宅です。

震災直後、福島県では1万4,000棟の応急仮設住宅を必要とし、プレハブの仮設住宅だけでは間に合わない状況でした。そこで、福島県内の業者を対象に公募を行い木造を中心とした仮設住宅を造ることになりました。本研究室も日本ログハウス協会東北支部に計画・設計側で企画段階から協力し、公募案で高い評価を頂き500棟割り当てられました。ログハウスは、基本的に材木を積み重ねて造られる点に着目し、仮設住宅で終わるのではなく、建設資材を復興住宅に再利用することを大きな柱としました。現在取り組んでいるこの仮設住宅の木材をリサイクルした半復興住宅モデルとして、県産材をふんだんに使った木造の「ロハスの家3号」を見たわけですね。「元の住まい」と「仮設住宅地」の二地域居住を視野に入れ、木材再利用・復興物語を組み合わせることによって、「ロハスの家3号」



は2020年のパッシブ住宅としての価値も加わりました。最終審査に残った作品の中には、震災を意識したものはありませんでした。そうした中で、「脱原発」「復興」をキーワードにしたこの作品への注目度は高かったように感じます。審査員からは「3.11以降のコンペとして、この視点を持ったことを評価したい」「コンペのアイデンティティになる作品」というようなコメントをいただきました。震災後の福島県の復興ストーリーの一つのあり方として非常に高く評価されたことが大賞につながったと考えられます。

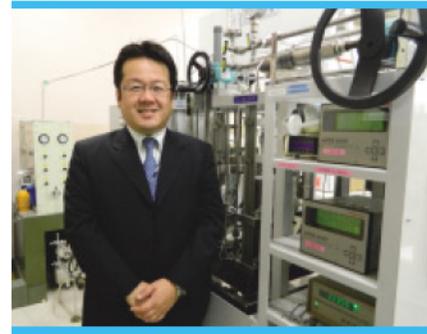
■アイデアを組み合わせる柔軟な思考

本学部で行っている研究プロジェクトとして、学内だけでなく、広く一般の方々や異分野・同分野の専門家にも理解してもらうことが大事だと考えています。今回は仮設住宅との組み合わせによって評価を得たように、何かをプラスすることによってその重要性や研究意義が増すことも再認識できたような気がします。何が求められているのか、それを知るために、社会の意見や評価を得る機会を持つことで、同時に理解者を増やし、その結果、少しでも多くの賛同を得ることができれば、研究の展開の幅も広がりが実現への可能性も膨らんでくるのではないのでしょうか。そういった意味で、大賞を取ったことで、少しでもこの研究が目目されることになればと思います。

今後は、福島県をどう復興させるかという問題にも、できる限り取り組んでいきたいと考えています。元に戻すだけではなく、エネルギー問題も含めて、20年、30年先のビジョンに今から着手していくことは大切だと考えています。さまざまなアイデアを組み合わせる柔軟な思考と対応で研究に従事しながら、「ロハスの家」の成果だけでなく、一つでも多くのアイデアを社会に還元できるように研究を重ねていきたいと考えています。

研究プロジェクトに携わった学生たちも、今回の受賞によってパッシブ住宅の重要性を認識するとともに、自分たちがやってきたことに少し自信を持つことができたようです。こうした教育的な面での役割も果たしていきたいと思っています。

※ロハスの家3号は11月に完成。次号でその概要を詳しくお伝えします。

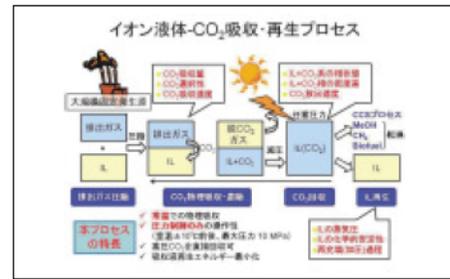


●最先端・次世代研究開発支援プログラム
**地球温暖化を防止するために
 CO₂吸収の新技术開発に挑む**

将来、世界の科学・技術をリードすることが期待される若手・女性・地域の研究者への研究支援及び「新成長戦略」に掲げられたグリーン・イノベーション・ライフ・イノベーションの推進を目的とした、2010年度独立行政法人日本学術振興会(JSPS)公募の「最先端・次世代研究開発支援プログラム」に、生命応用化学科の児玉大輔准教授の研究課題が採択されました。採択率5.8%という狭き門を突破した大研究課題「イオン液体を利用した二酸化炭素物理吸収プロセスの構築」は、CO₂削減につながる有効的な技術として大きな期待が寄せられています。世界最先端の研究に挑む児玉准教授に、その意気込みを語っていただきました。

■イオン液体で環境調和型プロセスを構築

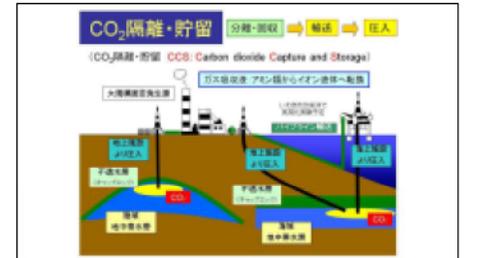
21世紀の環境問題の一つとして、常に取り沙汰される地球温暖化防止。1997年に京都議定書が議決されて以来、CO₂の排出量削減が急務となっています。問題解決の一つの方策として、火力発電所などの大規模な施設から排出される二酸化炭素を効率良く分離回収し、隔離・貯蔵することが挙げられます。しかし、現在活用されている技術では、多大な熱エネルギーを要するというデメリットがあります。例えば、アミン法と呼ばれる化学吸収法では、二酸化炭素を吸収した溶液を加熱してCO₂を分離するため、消費する熱エネルギーコストが問題になっています。そこで、着目したのが「イオン液体」です。イオン液体は、耐熱性があり、圧力を加減するだけで二酸化炭素のみを取り出し、容易に再利用できるという特長があります。高圧下でも、駆動可能なイオン液体をCO₂吸収液として利用できれば、熱エネルギーコストを大幅に削減できます。イオン液体は、陽イオンと陰イオンのみからなる常温溶融塩です。常温時に固体である食塩とは異なり、液体である温度範囲が広く、「揮発しない」「燃えない」「劣化しない」という特性があり、環境に調和する溶媒としても最適なのです。また、太陽電池やリチウムイオン電池、潤滑剤など様々な用途で、その利用が期待されています。実際、海外でも研究が進められていますが、国内での実績はほとんどありません。わが国として早急に取り組まなければならない課題だったことが、今回採択された理由の一つと考えられます。



**■日本大学工学部オリジナルの
 世界に1台しかない実験装置**

本研究室にあるイオン液体・二酸化炭素吸収実験装置は、この研究のために開発した世界に1台しかない日本大学工学部オリジナルの装置です。大きな装置であれば、使用する試料の

量も多くなります。実験コスト削減のためにも、装置を小型化する必要がありました。また、イオン液体自体のコストも決して安価ではありません。本研究室では、独自に合成したイオン液体を使って実験を行っています。少ない試料で、既存の装置より精度の高い実験を行うことができるようになり、効率も良くなりました。



本研究の目標は、安価でガス吸収特性に優れたイオン液体の合成と開発したイオン液体のCO₂吸収量を評価するとともに、イオン液体-CO₂熱力学物性推算モデルからガス吸収効果を明らかにし、イオン液体を利用した低コスト型の温室効果ガス吸収プロセスを実現することです。

東日本震災の影響で遅れていますが、国では福島県いわき市にある次世代の火力発電所(IGCC:石炭ガス化複合発電)から排出されるCO₂を分離回収し、いわき市勿来沖の枯渇したガス田に隔離・貯留する計画を進めています。CO₂を固定化する技術は5~10年以内の実用化を目指していますが、本研究の成果によって、さらにイオン液体の特性を活かした電気化学デバイス、化学反応溶媒や触媒としての利用など、高度で飛躍的な発展も期待できることから、ますます研究への意欲も高まっています。

本研究室の学生たちにとっては、最先端の研究に触れる絶好の機会。ここ工学部で学んだ先輩として、後輩である学生たちには「自分たちもやればできる」という達成感を味わい、自信につなげてほしいと考えています。

そのためには、このプロジェクトを成功に導くよう、研究活動に取り組んでいきます。



2011 就職最前線!

震災にも負けず、希望の就職をつかみ取った工学部生たちの就活の決め手はコレだ!

福島県庁に内定

公務員受験のプロによる 公務員試験対策講座を活用

新潟と福島で震災を経験し、道路の整備や自然災害に強いインフラ構築が重要と考え、計画段階からまちづくりに関われる公務員をめざしました。公務員試験対策講座は1年から参加。公務員受験のプロの方から、筆記試験や面接試験に関することを教わることでできたので、とても心強かったです。CSNaviに載っている過去問題の解説も重宝しました。公務員にも日本大学の卒業生が多く、説明会の場を設けてもらい情報収集できるのは工学部のメリット。公務員試験に向けては、勉強日と休息日のメリハリが大切です。



大久保 新さん
土木工学科4年

五洋建設株式会社に内定

面接に備えて、ふだんから 自分の言動を意識しよう

島国の日本にとって、港湾設備の整備・開発は必要不可欠。だから、海洋土木工事に強い会社を選びました。内定先でインターンシップを経験し、大学の座学では得られない貴重な体験ができました。工学部の就職支援の中で一番役立ったのは、個人・集団の実践模擬面接です。何気ない癖や言動の誤りなど、ふだんから意識して直すようになりました。就活をサポートしてくれる先生方が多いのも工学部の強みだと思います。長期戦になるので、企業研究や筆記試験対策などを毎日少しずつでも進めていきましょう。



松下 亮太さん
土木工学科4年

株式会社社井工務店に内定

早めのスタートで、 自分に自信を持とう

地元の企業で、女性の視点を活かしながら設計の仕事ができることが志望の動機です。最初の頃は、どんな会社が良いのかよくわからなかったのですが、まずはどんだん会社説明会に参加したことが好結果につながったと思います。就職支援の中では、就職ガイダンスや工学部就職セミナーが役立ちました。「日本大学」のネームバリューがあり、地元福島での就職に強いのも工学部の魅力だと思います。就活は早めにスタートすればするほど、自分に自信が持てるようになります。



森 久恵さん
建築学科4年

福島県ヤンヤン株式会社に内定

福島県内の求人豊富、 就職指導課を活用しよう

地元の企業を志望したのは、震災後、福島県から離れたくないという思いが強くなったからです。就職指導課のエントリーシート添削や就職試験対策、模擬面接などは、本番に向けて準備を進めるうえでかなり役立ちました。大手の就職サイトだけでなく、直接工学部に来る求人票も必ずチェックが必要です。就職指導課情報閲覧室なら福島県内の求人情報も豊富に揃っています。自分のやりたい仕事と会社が望む仕事のベクトルが一致すれば内定につながりやすいので、自己分析と情報収集に力を入れることが重要です。



喜古 雄貴さん
機械工学科4年

日本電気株式会社に内定

各学科の就職指導委員の 先生方に相談

携帯端末をつくらせている部署で、デバイスに関わる職種だったので、この会社を志望しました。企業の情報を調べ尽くし、質問される事柄を予想しながら、面接の練習を積み重ねたことが内定に結びついたと思います。内定をいただいた会社をはじめ、各業界の大手企業の学校推薦枠があるのは、工学部ならではの魅力。各学科に就職指導委員の先生がいるのも有り難いです。マッチングシートを見てもいい、具体的なアドバイスももらえました。面接では自信を持つことが大切。自分の意思と情熱をしっかり伝えましょう。



濱口 沙月さん
機械工学専攻2年

就職内定者に聞く!

株式会社関電工に内定

アンテナを広げて、早めに 行動することがポイント

電気設備関連の会社を希望していたところ、女子を求めている会社があると聞き学内の会社説明会に参加。その会社に内定しました。工学部には、企業とのパイプを持っている先生方が多く、学内の会社説明会も充実しています。特に、電気電子工学科は就職率も高く、バックアップも万全です。就職支援の中では、女子学生向け講座が役立ちました。スーツの着こなし方や髪型、お辞儀の仕方など、より実践的なことが学べました。ふだんから自分のアンテナを広げ、早めに行動することがポイントです。



佐藤 治子さん
電気電子工学科4年

京セラ株式会社に内定

学力よりも人間力、何か 打ち込めることを見つけよう

就職ガイダンスで、「自分の一生にかかわることなので、悔いのないようにしよう」という話を聞き、やることは全部やり尽くしました。できるだけ多くの会社に行くようにすることで、視野が広がったと思います。工学部を含めた日本大学の卒業生が圧倒的に多いことは、OB訪問などでも優位に働きました。サークルでは代表を務めていたので、物おじせず堂々と面接に臨めました。大学生活の中で、何か一生懸命打ち込めることがあると、それが自分のアピールにもなります。学力も大事ですが人間力を活かして頑張りたいです。



萩原 直也さん
電気電子工学科4年

京セラケミカル株式会社に内定

自己分析を大切に、 客観的な意見も参考にしよう

就活の成功の決め手は、自己分析だと思います。履歴書・エントリーシート・面接も、自己分析がしっかりできていれば、苦勞せずに臨むことができます。工学部で実施したR-CAPという自己分析テストはとても役立ちました。就職ガイダンスにも毎回参加。最初はわからなくても、就活を進めるうちに「なるほど、そういうことだったのか」と理解できるようになります。自分一人で何とかしようとせず、企業の方や親、就活仲間の客観的な意見を参考にし、積極的に情報収集することが大切です。



魚淵 達巳さん
物質化学工学科4年

株式会社工東微生物研究所に内定

「日本大学」という ブランドは大きな武器

将来は環境計量士になるという自分の夢を叶えるために、福島県内の環境証明事業会社の中から、環境分析の仕事ができる会社を選びました。工学部就職セミナーにも参加していた会社だったので、積極的に頭を覚えてもらうようにしたのが良かったと思います。「日本大学」というブランドは大きな武器。中でも、自然環境に恵まれていて、学力だけでなく人間的にも成長できるのは、工学部の魅力です。就活のポイントは、自分の夢に対する熱い思いをいかに相手に伝えられるかです。めげずに頑張ってください。



棚田 和恵さん
物質化学工学科4年

株式会社富士通エフサスに内定

CSNaviなどで就職に 必要な情報をキャッチ

IT関係の中でも保守系の仕事に興味があり、その分野で多くの実績を持っていることや、日本大学出身者が多かったことから、この会社を選びました。就職に必要な情報が得られるCSNaviやNU就職ナビは大いに役立ちました。情報工学科棟に掲示してある求人情報も逃さずにチェック。教授推薦やOB訪問などをうまく活用しながら、運やタイミングを味方につけたのが決め手につながったと思います。就活で大切なのは、今やらなければならないことを後回しにしないこと。自分らしさを前面に出しながら、気負わずに取り組むことです。



鈴木 優也さん
情報工学科4年

株式会社エヌ・ティ・ティ・データに内定

情熱を持って自分の やりたいことを伝えたい

就活では自己分析の大切さを実感しました。システム開発を通じて社会に貢献したいと思ったこと、自分を成長させてくれる会社だったことが志望動機。なぜこの会社で働きたいのか、どういう仕事がしたいのかを素直に伝えることができました。情熱を持って自分のやりたいことを伝えられる人は必ず良い結果を得ています。全国から多くの企業が集まる工学部就職セミナーは、福島県外の就職を考えている人にとって、時間や費用の面でも大助かりでした。また、多様な業界や企業に卒業生がいることも強い味方です。



後藤 優太さん
情報工学専攻2年

ここがポイント!

工学部の就職支援

企業就職試験対策

早めの就職試験対策で、
自分に自信が持てる

電気電子工学科4年

清水 啓さん



ここがポイント!

- ✓ 早めの準備で自信がつく。
- ✓ 本番に近い各種試験を体感できる。
- ✓ SPI対策講座の費用は大学が負担。

最初の頃は、就職に対して実感がなく、どんな感じなのかを知っておこうと就職試験対策講座を受けました。実際に受講してみて、緩んでいた気持ちが引き締まりました。また、SPIがどういうものなのか感触がつかめたので、その後の勉強にも活かすことができました。SPI対策は早い段階から始めるべきです。面接で聞かれたことや答えたことは、自分なりに書き出しておき、答え方などを検証しておく、あとで役に立ちます。

工学部は、多くの企業で卒業生が活躍しているので、先輩である私たちは、企業の担当者から好印象で見られるという強みがあります。諦めずに続けていれば、必ず成果はついてくると思います。



女子学生向け講座

女子学生向け講座で、
やるべきことが見えてくる

建築学科4年

須賀 ひかりさん



ここがポイント!

- ✓ 女性ならではの視点で徹底指導。
- ✓ 具体的なアドバイスで、何をすべきかがよくわかる。
- ✓ 就職のプロの指導で、実践的な知識が身につく。

就職ガイダンスの的一环として行われた女子学生向け講座は、とても有意義でした。今、どんなことをすれば良いのかを具体的に教えてもらったので、やるべきことが明確になり、自分でも活動しやすくなりました。お辞儀の練習など、より実践的なことを学べたおかげで、就職活動に対する不安も和らぎました。ときには立ち止まったり、考え直したりしながら、就職活動のやり方を変えていったのが良かったのかも知れません。大切なのは自分の人生設計をしっかりと考えることだと思います。

就職活動は、自分の夢の実現に通じる第一歩。やりたいことがあるのなら、自分自身を信じ、そのために行動することが大切です。自分の夢を見失うことなく、探し求めている会社と出会うように頑張ってください。



インターンシップ

インターンシップで、
仕事のやり甲斐を体感

情報工学科4年

笠井 亨さん



ここがポイント!

- ✓ 事前のガイダンスで、備えは万全。
- ✓ インターンシップの受入先が豊富。
- ✓ 体験前も体験後もガイダンスで、役立つ情報を入力。

「外から見た企業」ではなく、「中から見た企業」を知りたくて、3年の夏にインターンシップに参加しました。おかげで自分が想像していた業務内容との違いがよくわかりました。実際に働いている方の生の声を聞くことで、仕事のやり甲斐や現場での苦労を体感できたことは大きな収穫です。インターンシップ後、「この会社で働きたい」と思うようになり、最終的には内定をもらうことができました。就職活動を通じて自分の短所を見きわめ、一つずつ直していったことが成功の要因だと思います。

就職活動をするうえで、業界や企業についてよく研究し、自分に合った就職先を見つけることが大切です。その企業が求めている人物像に近づければ、必ず道は拓けてくるはずです。



公務員試験対策講座

公務員試験対策講座で、
憧れの公務員へ

土木工学科4年

室岡 大智さん



ここがポイント!

- ✓ 段階的に学べるので、確実に実力がつく。
- ✓ 夏期や春期の特別集中講座も有効活用。
- ✓ 教材を除く費用は、大学が負担。

工学部で学んだ知識を活かしながら、地元のために貢献したいという思いから公務員を志望しました。公務員試験対策講座を受講したのは1年の後期から。講座は段階的に行われていたので、自分なりにスケジュールを立てながら、勉強する癖を身につけることができました。特別集中講座での面接練習も大いに役に立ちました。専門試験に向けた土木工学科独自の対策講座では、過去問題などをうまく使っていたので、より具体的な対策を立てることができました。大学が公務員試験対策講座の受講料を負担してくれるのも、大きな魅力だと思います。

大切なのは「できるかできないか」ではなく、「やるかやらないか」です。合格の秘訣は最後まで諦めないことだと思うので、ネバーギブアップの精神で頑張ってください。

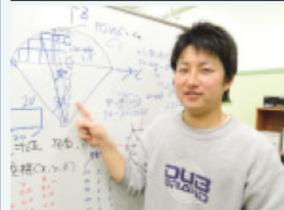


業界別就職セミナー

業界別就職セミナーで、
知りたい情報をキャッチ

建築学科4年

佐藤 慎紀さん



ここがポイント!

- ✓ 業界別に最新情報をキャッチ。
- ✓ 学内にいながら企業の担当者の話が聞ける。
- ✓ 就職活動の体験発表会で情報交換。

学科ごとに行われる業界別就職セミナーは、就職活動を進めるうえで、とても役に立ちました。実際に企業の担当者が学内に来てくれて、業務内容や社風など、自分が知りたい情報をキャッチできたことは、自分にとって大きなプラスになりました。就職活動の体験発表会も行われているので、具体的にどう活動すれば良いのか、自分なりにイメージすることができるようになりました。工学部全体で行われるのは大きな強み。工学部全体で行われる工学部就職セミナーも、多くの企業の話聞くビッグチャンスです。

求人情報や企業情報が豊富に揃っているのは、工学部の魅力だと思います。どんな形でも良いので、まずは就職活動を早めにスタートすることが好結果につながります。もちろん自分の希望を叶えるためには、根気強く続けることも大切です。



工学部就職セミナー

全国から多くの企業が集まる
工学部就職セミナーを有効活用

物質化学工学科4年

落合 孝浩さん



ここがポイント!

- ✓ 一流企業や上場企業が学内に集結。
- ✓ 企業の採用担当者と直接面談できる。
- ✓ 内定に結びつく絶好のチャンス。

一流企業や上場企業などが全国から集まる工学部就職セミナーは、工学部の大きなメリットです。学内にいながら手軽に参加できて、いろいろな業種や企業を比較できるのは、この上ない魅力だと思います。今、企業はどのような人材を求めているのか知りたくて参加したら、それぞれの企業が求める人材像をしっかりと把握することができました。工学部を卒業した数多くの先輩方が、さまざまな形で実績を残してくれているので、とても心強いです。

就職活動では、自分が採用する立場だったら、どんな学生がほしいと思うか考えてみるのが大切です。面接対策の一つとして、先生や友人と就職について真面目に話してみるのも良いでしょう。自分の考えがよくまとまり、本番の面接でも話しやすくなります。



“就職に強い工学部”のメリットを活かしながら、
自分の希望する就職先に決まった6人の先輩たちに、成功への秘訣を聞きました。

社会で活躍する卒業生



第一工業大学 工学部長
川崎 三十四さん

1970年、工学部建築学科卒業。1974年、大学院生産工学研究科修士課程修了。東海興業技術研究所次長、第一工業大学教授・建築学科主任、敬務部長、付属図書館長、学部長補佐を経て、2010年4月より工学部長(博士[工学]、技術士(建設)、1級建築士ほか保有)。前職では超高層建築の技術開発に従事。東北新幹線で東京-仙台間を何十回と往復し、車窓から校舎を眺め、後輩や大学の向上を祈っていた。佐賀県佐賀市出身。



鋼管コンクリート構造の施工現場にて(1997年)
(若きエンジニア(右から二人目))



鋼管コンクリート構造
施工実験(責任者として)
1997年5月

品質管理統括責任者として
携った東北一の超高層マ
ンション(1995年完成)



思い出深い入学時の写真

一念努力で夢を叶えよう

—日本大学工学部に入学した理由をお聞かせください。

20歳の頃、建築志向から物理学に進路変更するかどうかで迷っていましたが、数学の奥深さを知るたびに、やはり建築と思い直し、日本大学短期大学部工業技術科(夜間)から編入学しました。貯金もしていましたし、たまたま受験の日と休暇が重なったこともきっかけの一つになりました。

—建築の道を選んだのは、どのような理由からでしょうか。

佐賀県で過ごした中学時代、竹や木材の加工と建築の図面に興味を持ち、その延長線で建築を選びました。神戸市にある浄土真宗のお寺で修業しながら、昼は設計事務所働き、夜は工業高校で学んでから上京しました。

—大学時代の思い出をお聞かせください。

建築構造力学の宿題が多かったことです。先生方も添削に追われて大変だったろうと思います。卒業研究は病院建築の避難施設に関するもので、指導教授は小林秀弥先生でした。先生方と宿場町の大内村まで足を伸ばしたことは今でも忘れられません。

—大学時代の学びで特に印象に残っていることは何ですか。

先生方のきっちりとした勤務態度ではないでしょうか。助手の先生方もとても熱心でした。

—日本大学工学部の魅力は、どのようなところだと思いますか。

当時は家族大学と称されるほどアットホームでした。阿武隈川沿いにおいて、自然に囲まれているのは大きな魅力です。樹木の多いキャンパスは、ますます学びたい気持ちにさせてくれます。

—卒業後、現在の勤務先を選んだのは、どのような理由からでしょうか。

20歳の頃から研究職を志し、卒業後は西東京市役所、中央工学校、東海興業などで働いた後、声がかかったのが縁で1997年11月から第一工業大学(鹿児島県)に勤務しています。

—大学で得たものは、社会の中でどのような形で活かされていますか。

専門が細分化されており、大学で学んでも、ふだん使わなければ忘れてしまいます。しかし、日本大学工学部で学んだという自信から、目には見えない実力という形で活かされていると思います。

—第一工業大学の工学部長として、これからの時代にふさわしい工学はどうあるべきだと思いますか。

情報のスピードが速く、これからは世界を相手に思考しなければなりません。先端を走るのもよし、中堅、後進に身に置くのも良いでしょう。人にはそれぞれ役割があります。突き詰めていけば、安全で安心感を得られるような工学であってほしいです。

—これからの夢についてお聞かせください。

夢というほどではありませんが、未来を担うために頑張っている人に声援を送りたいです。歴史や心理学にも興味を持っています。

—日本大学工学部の後輩たちにメッセージをお願いします。

夢や希望は一念努力で必ず実ります。時間はかかります。あきらめたら終わりです。人生は「運、鈍根」で、運も実力の内と言われています。私的には答えを出すのに、他人に愛されて答を出す鈍で根気のある人が選ばれていくように感じています。

各界の第一線で活躍している工学部の卒業生を紹介します。



前田道路株式会社 取締役 営業本部統括
勝又 和成さん

1974年、工学部土木学科卒業。卒業後は前田道路株式会社へ入社し、米国ダラムを中心に12年間に及ぶ海外勤務を経験。その後、東北支店長を経て、現在は本店の取締役営業本部統括を務めている。静岡県三島市出身。



磐梯山測量実習が一番の思い出



37歳の頃、グラム・メリッソフ野球場改修工事の地鎮祭



応援団の市内パレード

チームワークを大切に、基礎を身につけてほしい

—日本大学工学部に入学した理由をお聞かせください。

大学が郡山市にあると聞いて、ほどよく田舎で自然が多いと思ったことが大きな理由です。実際に入学してみると、キャンパスの周辺はもちろん、街全体が豊かな自然に囲まれている。大学生活を送るうえで最適な環境だと感じました。

—土木工学科を選んだのは、どのような理由からでしょうか。

ダムの工事などで、自然を相手にする男の世界に憧れていました。土木というのは、いわば地球全体がフィールド。自然への思いやりを大切にしながら、最新の技術が学べることは土木工学の大きな魅力だと思います。

—大学時代の思い出をお聞かせください。

大学時代は応援団に所属していました。ふだんの活動は非常にハードで辛いと感じることもありましたが、今となってはとても良い経験につながりました。

—大学時代の学びで特に印象に残っていることは何ですか。

磐梯山にある研修寮へ泊まりがけで行ったことです。雄大な自然の中で、好きな測量実習を行ったことは、生涯忘れることができません。

—日本大学工学部の魅力は、どのようなところだと思いますか。

何といっても「文武両道」を基本にしているところです。自然の地で学び、サークルやクラブでの活動を通じて心身ともに鍛えられるところは、この上ない魅力だと思います。

—卒業後、現在の会社を選んだのは、どのような理由からでしょうか。

工学部は面厚の良い先生方が多く、恩師の先生から推薦していただいたことが、大きな決め手につながりました。もちろん、土木が主体の会社であったことも理由の一つです。

—大学で得たものは、社会の中でどのような形で活かされていますか。

測量実習や卒業研究などでは、チームワークの大切さを学びました。実際の仕事の現場でもチームワークは必須なので、ぜひ皆さんも身につけてほしいと思います。

—東日本大震災後は、会社としてどのような対応をされましたか。

津波で大きな被害を受けた仙台空港の早期開港と高速道路などの復旧に寄与しました。今も地域の復興に向けて、さまざまな対応を行っています。

—これからの夢についてお聞かせください。

校友会東京支部の会長として、校友会の絆や会社の仲間との絆をさらに深めながら、自分なりに楽しく生きていきたいと思っています。日本全国に卒業生がいるのは、本当に心強いです。

—日本大学工学部の後輩たちにメッセージをお願いします。

建設会社の人間関係というのは、運動部の人間関係と通じるところがあります。また、専門分野は基礎が大切なので、まずはしっかりと基礎を身につけることです。そのためには実習や読書にも力を注いでほしいですね。皆さんが工学部で4年間続けたことは、将来必ず生きてきますから。